

I 古墳時代の祭祀

1 古墳時代祭祀の変遷

—— 祭祀とは

「祭祀」とは一般に神々や祖先をまつることとされる。ただ、「神々」をまつることと、「祖先」をまつることは厳密に言えば異なる儀礼であることも確かである。そのため、両者の相違を重視する場合、あるいは別々に検討対象とする場合など、それぞれを区別する名称が必要となる。両者を分けて考える場合、前者は「祭祀」あるいは「カミマツリ」と呼ばれる。そして後者は「葬送」と呼ばれ、死者・屍を墓まで葬り送ること、あるいは葬るのを見送ることとされる。そうした「祭祀」や「葬送」の際に行われる行為は「儀礼」と呼ばれる。

古墳が盛んに作られた時代、古墳・集落・首長居館・峠など様々な場所で祭祀が行われてきた。こうした祭祀は、古代国家が形成される過程での、政治的・社会的状況が反映されている。

祭祀遺跡や古墳における祭祀や儀礼を体系的に捉えた笹生衛氏の論は、現段階における研究の到達点と言える(笹生衛2016)。笹生氏は、「神」とは豊かな恵みを与える一方、災害をもたらす自然環境や事物の特別な働きに、人間が感じた超越的な存在と定義する。そして「祭祀」とは、超越的な存在に対し一定の儀礼体系(祭式)にもとづき祈願などの意思表示を行うものと位置付ける。

—— 祭祀の変遷

ヤマトの地において、古墳が発生・展開する3・4世紀、最も重要な地が奈良県桜井市に広がる纏向^{まさむく}であった。纏向の背後には秀麗な山容を呈する三輪山があり、人々の信仰を集めていた。さらに物部氏が祭祀を担ったとされる天理市石上神宮、布留川^{ふる}で水の祭祀が行われたと考えられる天理市布留遺跡など、重要な遺跡が集中する。そして、三輪山では磐座^{いわくら}がいくつか確認され、そのうちの山ノ神遺跡では土製品、石製模造品に加え、素文鏡^{すもんきょう}なども出土している。

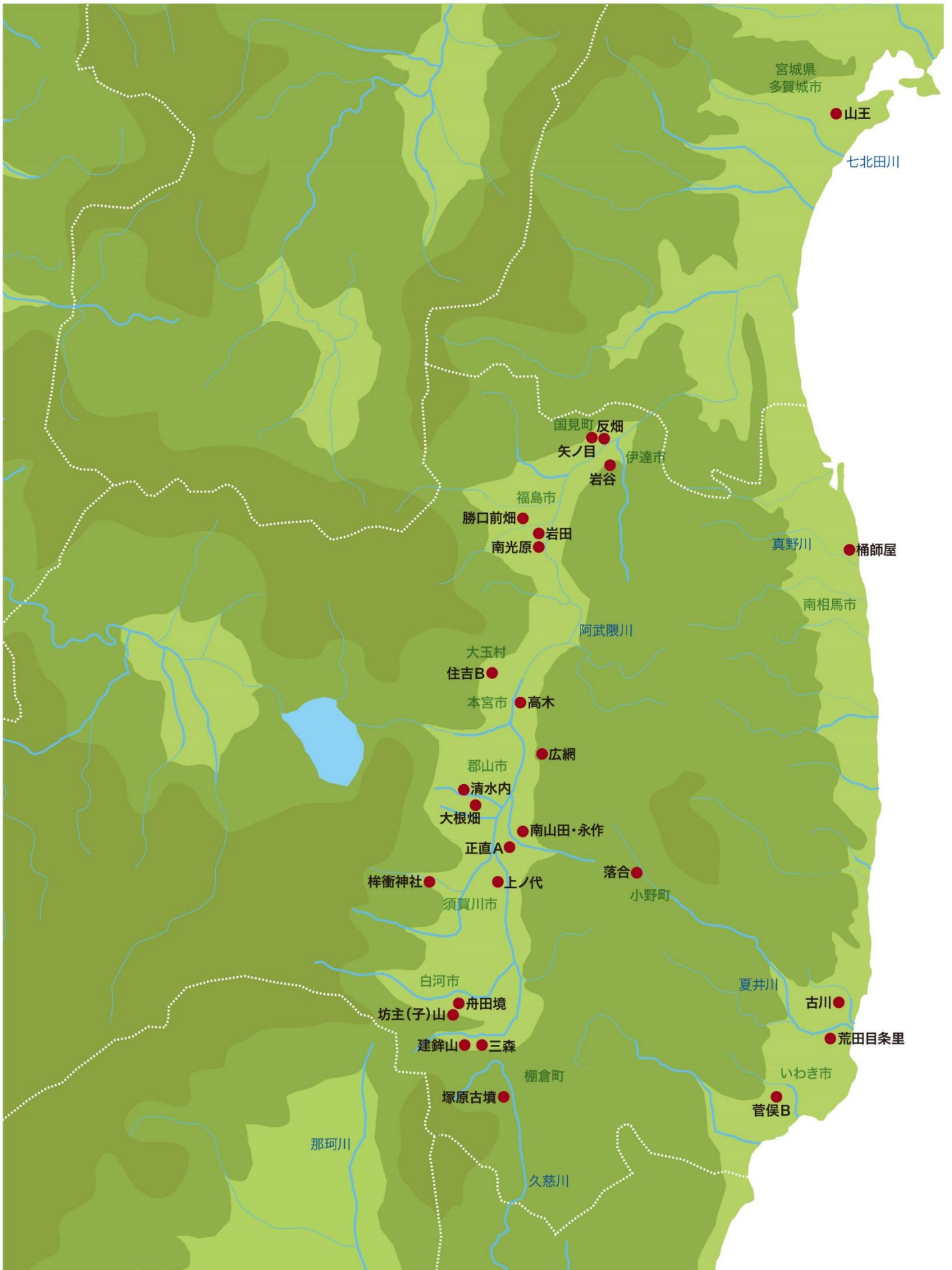
4世紀後半に出現した石製模造品は5世紀に盛行する。石製模造品は剣や鏡などを石で象った祭祀遺物で、関東地方では、畿内を凌駕するほど多量の出土量を誇る。その中心の一つとなった群馬県では、6世紀代も石製模造品を用いた祭祀が顕著にみられる。さらに、火山灰の下に当時の生活面を残した遺跡が多数確認されており、方形区画遺構や集落、水田や畠で行われた祭祀が明らかとなった。それらの特徴として、模造品とともに出土する多量の土器の存在なども上げられる。

7世紀後半から8世紀には、地方に国府^{くんが}や郡衙が置かれ、中央集権体制が確立していく。そして、中央で行われた木製人形などを使用した祭祀が行われるようになる。ただそうした祭祀は、中央と関係性の深い遺跡に限られたものであり、一般の集落にも遍く浸透した^{あまね}ものではなかった。



三輪山(奈良県桜井市)

関連遺跡分布図



2 福島県の祭祀遺跡・祭祀遺構概観

福島県における祭祀の特徴として上げられるのは、柵列あるいは溝などで区画された空間内部での祭祀が比較的多く確認される点である。前期の菅俣B遺跡、中期の清水内遺跡・三森遺跡、後期の舟田中道遺跡・高木遺跡など、いずれも特殊な祭祀のあり方を呈している。さらに、全国的にも著名な建鉾山祭祀遺跡をはじめ、磐座を対象とした祭祀も顕著に認められる。これらは、一般の集落において通時的に見られる手捏ね土器^{つくね}などを用いた祭祀とは対照的な祭祀である。こうした遺跡・遺構は福島県に限ったことではないが、多彩な内容であることは首肯されよう。そうした視点から、福島県の古墳時代祭祀遺跡・祭祀遺構について概観してみよう。

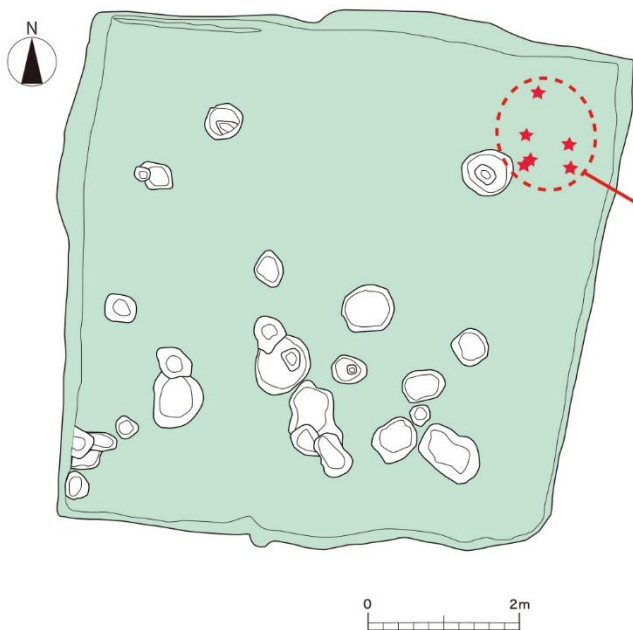
—— 古墳時代前期

集落を中心に祭祀遺物の変遷を概観すると、前期には手捏ね土器があり、土製品では土製丸玉も祭祀に使用されたと考えられる。この時期の遺跡には小野町落合遺跡13号住居、西郷村道南遺跡4号住居、いわき市寺台遺跡祭祀遺構などで手捏ね土器や土製丸玉が出土している。なお、小型丸底壺や小型器台、小型高坏という小型の精製土器も、畿内を発祥とする祭祀性の強い遺物と言える。なお、遺構としては、菅俣B遺跡の独立棟持柱建物(1号掘立柱建物)が、柵列による方形区画内部の神殿建築として注視される。ここでは落合遺跡と菅俣B遺跡についてみる。

落合遺跡は小野町に位置し、東北横断自動車道の建設計画に基づき、1992(平成4)年に調査がなされた。出土遺物には手捏ね土器が約200点、土玉が6点含まれている。

特に13号住居からは、土師器片のほか手捏ね土器3点・土玉6点・紡錘車1点等、祭祀に関連する土製品が出土している。手捏ね土器と土玉は住居の北東隅から集中して出土しており、竪穴建物内での祭祀を考えるうえで興味深い事例である。

また、土坑が竪穴建物に関連して周辺に存在したことが推定されている。45号土坑からは土師器片48点に加え手捏ね土器が32点出土している。いずれも欠損しており、祭祀などで人為的な破損を受けた後に一括廃棄された可能性が推察される。



落合遺跡13号住居出土土器
住居の北東隅からまとめて出土した。

菅俣B遺跡は、いわき市に所在する遺跡である。土地区画整理事業にともない、1992(平成4)年度から1997(平成9)年度にわたり断続的に調査が行われ、古墳時代前期を中心とする遺跡であることが明らかとなった。検出された遺構には二重柵列、竪穴建物などがある。中でも独立棟持柱を持つ1号掘立柱建物が見つかったことは、祭祀を考える上で非常に重要だ。

独立棟持柱は、建物の妻側の壁の外側で棟を支える柱のことである。古くは弥生時代に独立棟持柱を持つ建物を神殿として利用していた様子が土器に絵画として描かれ、さらに古代出雲大社や、今城塚古墳出土の家形埴輪にも独立棟持柱の構造がみられる(広瀬2003)。すなわち、独立棟持柱は祭祀との強い関わりを示す一つの指標といえる。

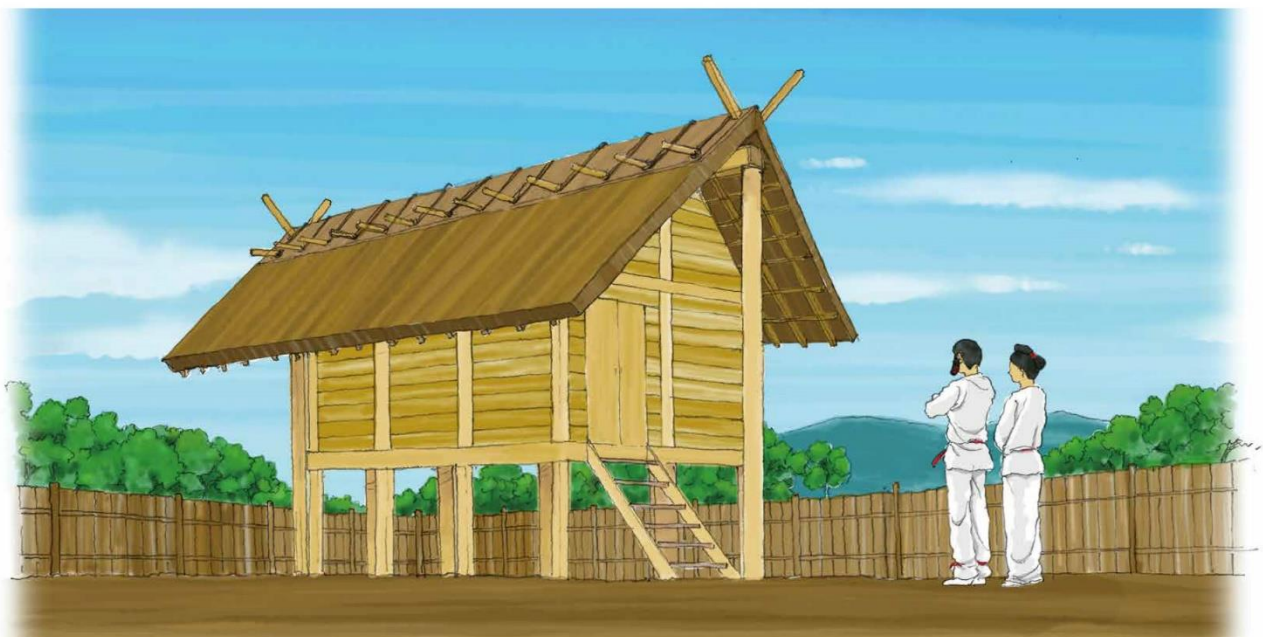
菅俣B遺跡では、二重柵列に囲われた首長居館が見つかっており、柵列に囲われた空間の中に独立棟持柱を持つ建物がみられる。このような神殿と思われる建物と、実際の住処とみられる一辺が10mを超える規模の竪穴建物が柵列の中に配置されていることから、一般の人々とは隔絶された人物の居所であると位置付けられている。また、柵内でも場所により役割が分かれていたようで、柵内中央の未調査区を挟んで東側では小型の竪穴建物が並んでおり、従者用の住居と推定される。



菅俣B遺跡における居館2期の遺構配置図



菅俣B遺跡1号掘立柱建物



菅俣B遺跡1号掘立柱建物復元図

—— 古墳時代中期

古墳時代の中期から後期初頭は、石製模造品が出現し隆盛を極める時期にあたり、多くの祭祀遺跡・祭祀遺構が出現する。いずれも石製模造品を多量に出土することから祭祀遺跡・祭祀遺構と判断される。白河市建鉾山祭祀遺跡は秀麗な山を対象とし、国見町矢ノ目祭祀遺跡・国見町反畑祭祀遺跡・郡山市正直A遺跡1号祭祀は、水を対象とする祭祀の可能性が高い。また、いわき市中塩祭祀遺跡も古くから知られた祭祀遺跡である。石製模造品に関する遺跡はII章以降で詳述するため、ここでは宮城県山王遺跡と郡山市清水内遺跡の事例に触れる。

山王遺跡は、宮城県多賀城市に位置する遺跡である。特徴的な遺跡でありここで取り上げている。仙塩道路の建設計画に伴い、1988(昭和63)年に第一次調査(試掘)が行われて以降、1992(平成4)年に至るまで、断続的な調査が行われた。幅広い時代の痕跡が残るが、古墳時代中期においては竪穴建物や鍛冶遺構・土壌墓・木組み遺構などが見つかっている。

SX230遺物包含層は、一般の生活廃棄物と思われる多様な遺物が出土しており、古墳時代中期の竪穴建物群に伴う「ゴミ捨て場」と位置付けられている。そこからはト占ぼくせんに使用されたと思われるニホンジカの肩甲骨が23点見つかっている。祭祀の道具についても他の生活廃棄物と同じように一括廃棄されたようである。23点のうち3点は、「+」や「⊥」字形の跡が残るなど、ト占の状況がよくわかる資料である。ト骨の多くは焼かれたものが多いことから、占いの終了時には焼いて神性を払拭したとされる。



山王遺跡SX230遺物包含層遺物出土状態



山王遺跡SX230遺物包含層出土遺物

清水内遺跡は郡山市に位置する遺跡で、その重要性の一つは、5世紀の文物に反映される文化的・社会的変革がコンパクトに認められる点にある。さらにこうした要素が、集落の推移する中で動的に捉えられることは、東北地方において特筆すべきものと言える。

では、遺跡の展開を祭祀の変遷を中心に見てみよう。清水内Ⅰ期(5世紀第1四半期)、西から東へ流れる河川の周囲に点在する微高地上に、集落が出現する。希少遺物の出土する竪穴建物と鍛冶遺構は集落の東寄りに限られる。2区の河川で祭壇状の木組みが作られ、水を対象とした祭祀が行われた。この時期、水を対象とした祭祀が全国で見られる時期でもある。遺跡は「清水内」という地名が端的に示すように、水が豊富な場所にあり、こうした地形が集落の選地につながった。低地の開発には鉄器が必要であるため、鍛冶技術も当初から導入されていたか、あるいは鍛冶技術を有する集団が集落を形成した。



祭壇状木組み遺構

清水内Ⅱ期(5世紀第2四半期)、祭祀の場と考えられる方形区画遺構が出現する。継続して水辺での祭祀が行われる一方、石製模造品という新たな祭祀遺物の導入が図られ、方形区画遺構西側の空間で祭祀が行われている。竪穴建物の分布及び祭祀遺構の配置から、集落の中心そして祭祀の場がともに西側へ移動していることが明瞭である。



方形区画遺構



石製模造品

清水内Ⅲ期(5世紀第3四半期)は、集落が大きく変化する時期といえる。6区では竪穴建物が見られなくなる一方、西側の4区で建物が増加し、集落の中心が西側へ移動する動きはさらに明瞭となる。一方、水辺付近での祭祀は確認されていない。そして竈の導入とそれに伴う食器組成の変化など、様々な面で大きく変化することが分かる。

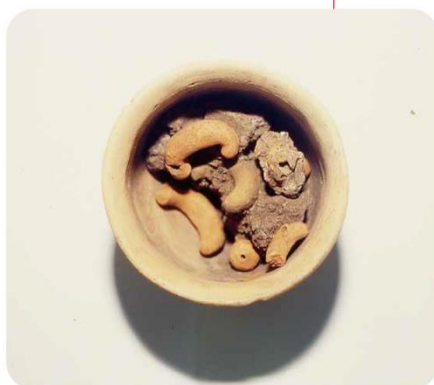
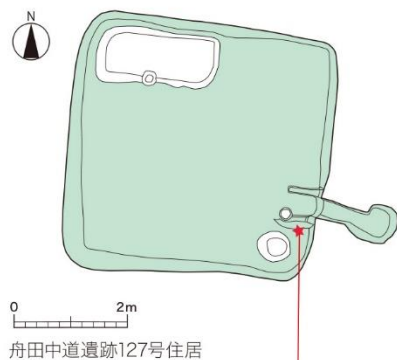
—— 古墳時代後期

石製模造品は、福島県内では6世紀前葉にわずかに残存するものの、ほとんど見られなくなる。それに代わるように、手捏ね土器、そして土製模造品が主流となる。この時期を代表する祭祀遺跡に須賀川市杵衝神社祭祀遺跡があり、多量の手捏ね土器が出土している。こうした変化は集落も歩調を合わせ、5世紀には石製模造品の影に隠れ目立たなかった手捏ね土器や土製模造品が再び増加する。郡山市大根畑遺跡3・4号住居、相馬市大森A遺跡、天栄村山崎遺跡などで、手捏ね土器や土製模造品などが出土している。また、白河市舟田中道遺跡では土製勾玉と鉄滓が鉢の中から出土し、本宮市高木遺跡では多数の祭祀の痕跡が確認された。

舟田中道遺跡は、白河市に所在する遺跡である。東に隣接して全長約71mの前方後円墳・下総塚古墳が存在し、阿武隈川を挟んだ北側丘陵には、谷地久保古墳・野地久保古墳が築造される。当時から要所とされる土地だったようだ。

舟田中道遺跡では、溝と柵列で区画された首長居館が確認されている。およそ東西60m×南北70mの規模が推定されている。居館内に祭祀場と断定できる痕跡は残っていないが、居館東側の溝より手捏ね土器や大型の須恵器甕が出土している。

127号住居からは、土製の勾玉と丸玉が出土している。鉢の中に入った状態で鉄滓とともに見つかったおり、当時の祭祀を考える上で興味深い資料だ。カマドの近くから見つかっていることから、カマドに関連した祭祀的な行為がなされたものと考えられている。



舟田中道遺跡127号住居出土遺物
鉢の中から土製勾玉・丸玉と鉄滓が出土した



舟田中道遺跡方形区画全景(上方北)
溝と柵列により構成される区画内部に竪穴建物が多数見られる

杵衝神社祭祀遺跡は、須賀川市西部に位置する。亀居山と呼ばれる西から東に伸びる独立丘陵の東端には杵衝神社があり、社殿の背後に磐座がある。この磐座は「要石」と呼ばれ、以前より神の依り代として信仰の対象となっていた。遺跡は1951(昭和26)年頃に地元の人に発見された。要石に近いことから、祭祀遺跡の可能性が高いとして、1956(昭和31)年に正式な発掘調査が行われた。

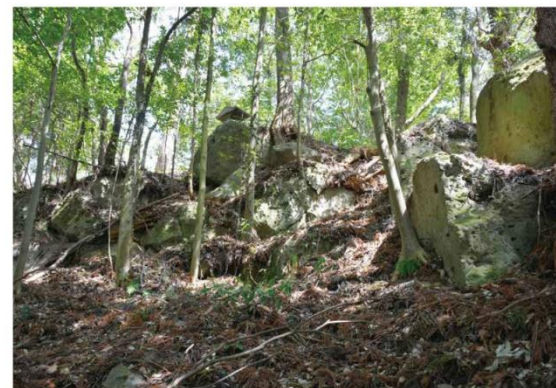
遺跡は、この磐座と山頂北西端の急斜面を下った山の中腹にあり、土器を埋納したと思われる場所が3箇所確認され、それぞれA・B・C地点という名

称が付けられた。調査した面積は60㎡とわずかであるものの、土師器および手捏ね土器を中心とする大量の遺物が出土した。A地点からは手捏ね土器が見つかっておらず、出土する遺物の特徴が他の2箇所と異なる点は注意される。

土師器の特徴から6世紀中葉から7世紀前半の年代が考えられる。磐座の威容を最も良く感じ取れるのは、磐座南側からの光景で、反対側の北側はやや平坦な地形となる。大量の遺物が出土したのは磐座の北西側にあたることから、磐座を対象に祭祀を行い、祭祀終了後、磐座と離れた場所に丁寧に土器を埋納したと思われる。



杵衝神社祭祀遺跡想像図



杵衝神社祭祀遺跡の磐座
杵衝神社後背の神域にある「要石」と呼ばれる磐座。



杵衝神社祭祀遺跡遺物出土状態

高木遺跡は本宮市に位置する。阿武隈川の右岸にあり、築堤工事の計画に基づき1999(平成11)年度に調査が行われた。7世紀を中心に営まれた大集落であり、650棟を超える竪穴建物と、区画のための大規模な溝と祭祀の痕跡が見つかった。大規模な区画で囲われた集落を、菅原祥夫氏は「区画集落」等と表現し、集落中央の旧河道を挟んで首長居住区が存在したとする(菅原2021)。

水辺に近い位置関係から、発掘当初より水辺の祭祀が行われたとされる見解が主流であるが、近年は高木遺跡出土の祭祀遺物について「量・質ともに集落祭祀の範囲をこえて」いることや、安達駅に比定される小幡遺跡との位置関係に注目し、より具体的な祭祀の内容として、交通関連の祭祀の可能性が指摘されている(菅原2021)。

1号溝は、自然堆積したと思われる溝である。炭化物や焼土が全体を通して見られ、溝に伴って祭祀遺構である13号集石遺構と6号特殊遺構が発見された。

13号集石遺構は、窪みに焼土粒・炭化物を少量含んだ土が充填され、その上面に礫が敷かれる。礫、そして埋土上面も熱が加わった痕跡が見られ、祭祀に火を用いたことが推察されている。

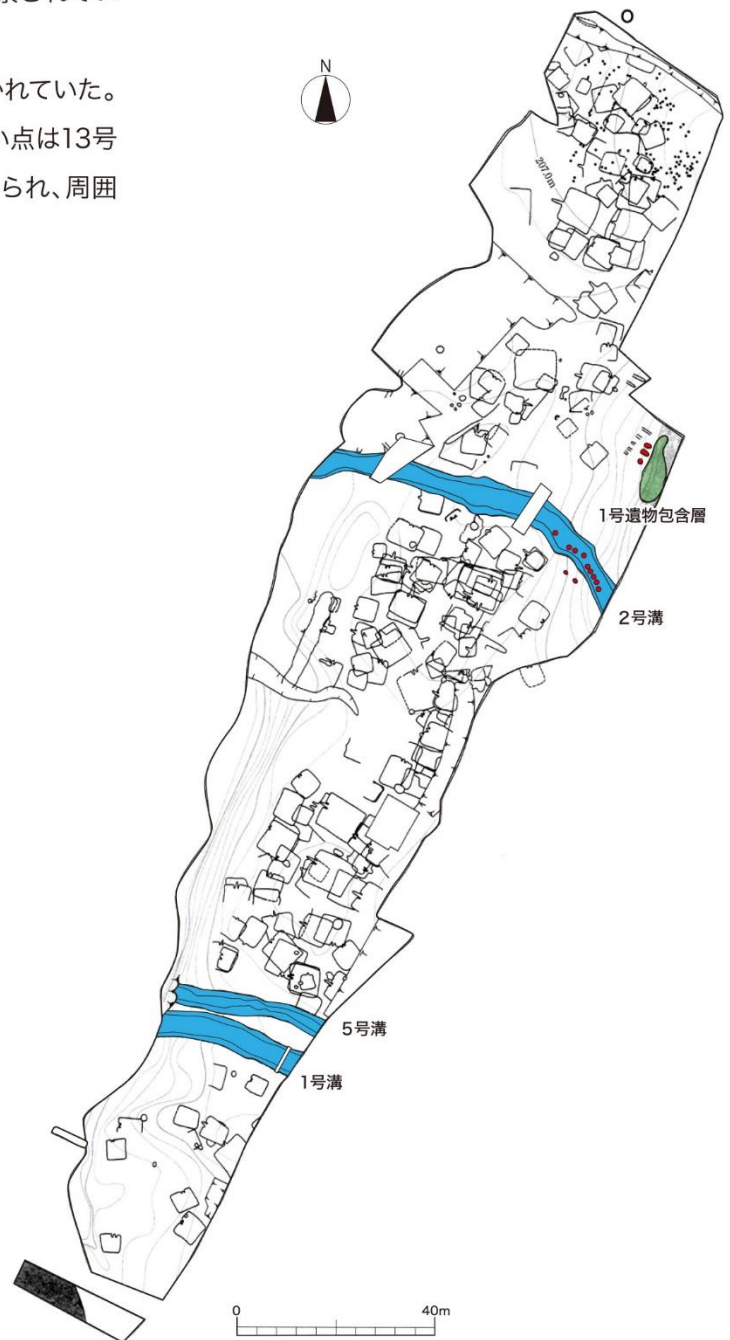
6号特殊遺構は、円形の窪みに土師器の甕が3点置かれていた。底面に直接土器が置かれている点、礫が敷かれていない点は13号集石遺構との違いである。同じく火が焚かれた痕跡がみられ、周囲からは土師器の坏と銅釧が1点ずつ出土している。



高木遺跡1号溝(南東より)



高木遺跡1号溝・6号特殊遺構(西より)



2号溝は集落の内部を区画した大溝の一つである。この溝の内部から、祭祀遺構が9箇所確認されている。祭祀遺構の分布は後背湿地のある遺跡東側に偏っており、1号遺物包含層と近い位置にある。細部に違いは見られるものの、河原石を配置すること、火を焚くこと、土器を伴うことはおおむね共通しているようで、当時の祭祀の一端がうかがえる。

2号溝からは、土製勾玉・土製鈴鏡・手捏ね土器など、祭祀に特有の土製品が出土している。このうち土製鈴鏡は、鈴を表現した切れ込みが表現されるなど、丁寧に作りこまれていることが分かる。



高木遺跡2号溝遺物出土状態

1号遺物包含層の形成された場所は、後背湿地の落ちぎわであり、土師器片3,787点を中心に大量の遺物が見つかった。その中には手捏ね土器や、土製鏡・土製勾玉といった祭祀の道具も含まれる。この遺物包含層の斜面上には、熱が加わった形跡のある5～7号土坑が並んでおり、遺物包含層はここで行われた祭祀の道具が廃棄された場所であるようだ。



高木遺跡における祭祀想像図
5～7号土坑と遺物包含層

大根畑遺跡は、郡山市に位置する古墳時代中期から奈良・平安時代にかけての複合遺跡である。このうち、古墳時代後期の3・4号住居から手捏ね土器が多数出土している。3号住居では、甕の底部とともに竪穴建物の床面から浮いた状態で見つかったため、竪穴建物の埋没する過程で何らかの祭祀が行われたと思われる。4号住居では、南西コーナー付近にあるピット1周辺の床面より、手捏ね土器が3点まとまって出土した。

岩谷遺跡は伊達市にあり、阿武隈川により形成された沖積地に張り出す舌状丘陵に位置する。遺跡は現在、神社の境内・果樹園となっている。この丘陵の頂部には大きな岩石が露出しており、ふもとに淡島神社がある。岩石は磐座として信仰の対象になっていたと思われる。

現在、伊達市が所蔵する遺物は、1964(昭和39)年11月25日の日付が付された甕の口縁部と、土製品である。土製品は棒状・U字形を呈しているが、何を象っているのか不明なものが多い。このほか、土玉・手捏ね土器がある。土師器の特徴から、古墳時代から奈良時代ごろの遺跡と考えられる。



岩谷遺跡磐座



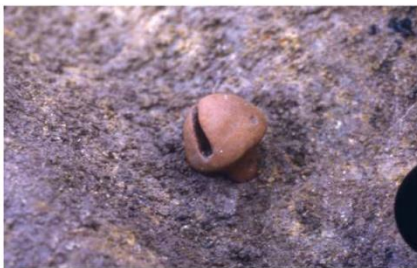
岩谷遺跡出土遺物

古墳が築造されなくなった奈良～平安時代の祭祀にも触れておこう。いわき市向山遺跡祭祀遺構から多量の手捏ね土器と土製模造品、福島市御山千軒遺跡で低湿地遺物包含層から木製形代(馬・刀形)が、郡山市広網遺跡から土鈴おやませんげんが出土している。

広網遺跡は郡山市に位置する遺跡である。竪穴建物61棟・掘立柱建物6棟・登窯3基・平窯30基が確認された、土器製作が行われていた遺跡である。三春ダム建設に伴い、水没地の代替地として開発するため、1984(昭和59)年に本格的な調査が実施された。

遺跡では、土鈴の出土が特徴的である。土鈴とは、丸(がん)を封じ込めた中空の球体に、一文字の孔をあけ、紐を通す環のついた土製の鈴である。出土したものの中には、球体の両側面に孔をあけ、共鳴効果を上げているもの、丸を2個入れたものなど、様々なものがある。13・43・59号住居からは、手捏ね土器などととも土鈴が出土している。33号住居からは、土鈴とともに鳥を象ったと思われる土製品が出土したことも興味深い。いずれの住居でも、カマド付近からの出土が目引く。特に43号住居はカマド付近から集中して出土しているため、カマドにまつわる祭祀を行った事例の可能性がたろう。

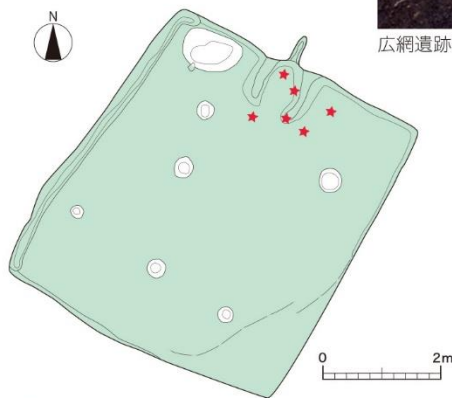
なお、土鈴は群馬県末沢窯跡・埼玉県新開遺跡あぼっけ・茨城県木葉下窯跡など、奈良～平安時代の土器製作に関わりのある集落や窯からの出土が多く、共通する祭祀が行われた可能性も考えられる。



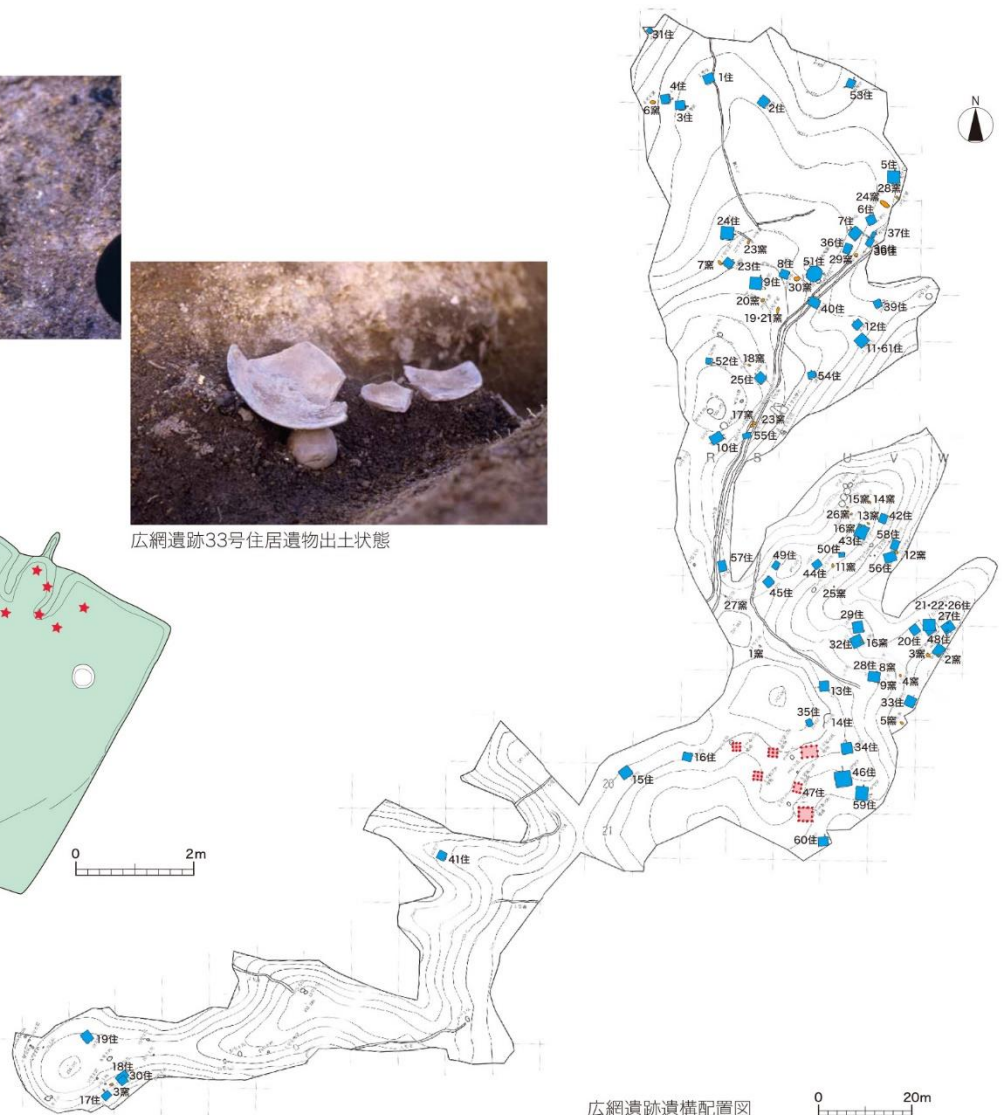
広網遺跡59号住居遺物出土状態



広網遺跡33号住居遺物出土状態



広網遺跡43号住居



広網遺跡遺構配置図

Ⅱ 正直A遺跡にみる集落の祭祀

1 “正直祭祀遺跡”と正直A遺跡

—— 正直祭祀遺跡

郡山市田村町正直の丘陵は、古くから石製模造品の出土が知られ、本格的な発掘調査がなされる以前は、“正直祭祀遺跡”と呼称されていた。この地点では、1949(昭和24)年の首藤保之助氏による調査を皮切りにたびたび調査が行われた。首藤氏は、1917(大正6)年～1962(昭和37)年にかけて、日本全国の遺跡から考古資料を収集し、その記録を『蒐集記録』^{しゅうしゅう}としてまとめている。

1956(昭和31)年には國學院大學の亀井正道氏・佐野大和氏らによる調査が行われる。そして、祭祀終了後、不要になった祭器類が廃棄された所と推定され、祭祀の執行された場所は、北側の高所と推定された(亀井1966)。

1983(昭和58)年の第一次試掘調査、および1992(平成4)年の本格的な発掘調査で、集落遺跡であることが明らかとなる。そして、正直A遺跡と呼称され、祭祀遺構は集落の中央に位置することが判明した。その性格については、祭祀そのものの姿を示すもの、あるいは祭祀後の廃棄の場などが想定されてきたが、根拠となる材料はなかった。しかし、正直A遺跡の発掘調査により、遺構の内容に論及することが可能となった。それは1号祭祀と“正直祭祀遺跡”の共通性である。両遺構とも、埋没谷に面する緩斜面に位置し、石製模造品の内容も大きく変わることがない。そのため、共通する性格のものであったと考えられる。



正直遺跡出土遺物(首藤保之助採集)



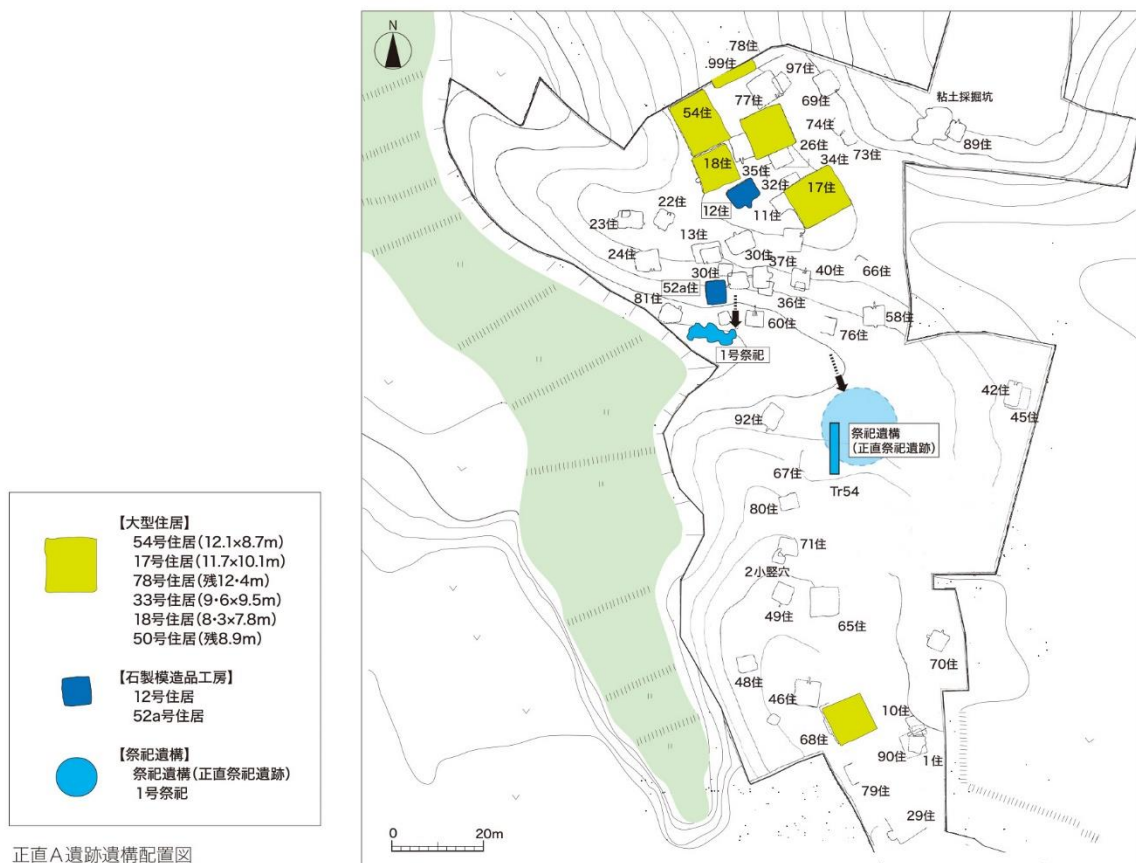
正直A遺跡(上方北)

—— 正直 A 遺跡

正直 A 遺跡は、阿武隈川による沖積地に面する丘陵上に位置し、両側を開析谷に挟まれている。ほぼ全域にわたり試掘調査がなされ、遺跡の西南部を中心に発掘調査がなされた。その結果、総数97棟の竪穴建物が検出され、5世紀後半から6世紀初頭の竪穴建物が57棟確認された。

調査区は埋没谷を挟んで北側と南側に分けられ、北側では濃密な遺構の分布が確認された。丘陵の高所には大型の竪穴建物が見られる。54号住居(12.1×8.7m)、17号住居(11.7×10.1m)、78号住居(残12.4m)、33号住居(9.6×9.5m)、18号住居(8.3×7.8m)など、一辺が10mに近い竪穴建物がある。その周囲にあるのは小規模な竪穴建物であり、対照的である。石製模造品工房は丘陵高所の12号住居と埋没谷に近い位置に52a号住居がある。いずれの竪穴建物からも多量の製品・未成品・剥片が出土している。そして、多数の石製模造品を用いた祭祀はさらに南側の埋没谷周辺に位置する。1号祭祀は埋没谷の北側緩斜面に近い位置に、“正直祭祀遺跡”は南側の丘陵が北方向へ緩やかに傾斜する地点にある。なお、調査区南側では調査面積は狭いものの、丘陵高所に大型の50号住居(残8.9m)があり、北側と同様の傾向を見ることが出来る。

一辺が10mを数える大型の竪穴建物は丘陵の高所に位置し、相対的に小規模な住居はその周囲に分布することから、竪穴建物の規模と立地に相関関係が認められる。大型竪穴建物が即集落の中心人物、有力者に直結するものではないが、三ツ寺I遺跡で検出された事例などから、首長層に関連する蓋然性は高い。



	出土遺構・地点	剣形	有孔円板		勾玉	白玉	紡錘車	他(未成品等)	
			双孔	単孔					
祭祀遺構(正直祭祀遺跡)									
1949(昭和24)年	首藤保之助調査	A・B地点	242	154	5	10+		子持勾玉1 鏡形1	
1956(昭和31)年	國學院大學調査	トレンチ	61	74		24		形状不明破片200	
1983(昭和58)年	福島県第1次試掘調査	54トレンチ	27	3	19	2	60	1	剣欠損11 勾玉欠損1 欠損未製品33
1992(平成4)年	福島県発掘調査	遺構外	57	55	35	25	168	4	剣形未製品5 円板未製品1 不明未製品4
1号祭祀									
1992(平成4)年	福島県発掘調査	1号祭祀	36	77	16		122		剣形未製品2 円形未製品3 白玉未製品1 管玉状1 剥片11

正直 A 遺跡の石製模造品出土点数

—— 1号祭祀

1号祭祀は集落の中心部からわずかに離れ、現在の谷水田に面している。数多くの土師器と石製模造品が出土した。土師器では、図化されたもので坏48点・埴15点・甕14点・高坏2点となる。この1号祭祀と隣接する52a号住居からは最大径57cmを測る大型の壺が出土しており、1号祭祀との関連が深いことが考えられる。また石製模造品は、剣形36点・剣形未成品2点・双孔円(方)板77点・単孔円板16点・円形未製品3点などが出土している。1号祭祀で出土した石製模造品と特徴を同じくするものが、隣接する2棟の石製模造品工房(12号・52a号住居)で出土していることから、その多くは両工房で作られた可能性が高い。

出土状態を見ると、中央部では非常に密な状態で出土していることが分かる。これに対してやや離れた位置では甕と小型壺(埴)、そして坏が一つのセットになるようにも見える。おそらく、こうしたセットに石製模造品が加わり祭祀が行われたと想定される。

1号祭祀が対象とする祭りについては、報文でも積極的に述べられている。それによると、「目の前を流れる湧水(発掘時には埋没谷)」を上げ、「湧水を中心とした、農耕祭祀」とした(福島県教育委員会・福島県文化センター1994)。当時、どれだけの湧水があったのか判断はできないものの、1号祭祀あるいは“正直祭祀遺跡”は湧水を対象したものであっただろう。



正直A遺跡1号祭祀

2 倉庫兼用の石製模造品工房

正直A遺跡からは2棟の石製模造品工房が確認されている。丘陵高所の12号住居と埋没谷に近い位置の52a号住居である。いずれの竪穴建物からも多量の製品・未製品・剥片・原石が出土している。

12号住居は6.3×5.6mの長方形の竪穴建物である。明確なカマドの痕跡はなく、炉と思われる焼面が6箇所見られることから、常時居住していたのではなく、石製模造品を製作する場合にのみ使用されたものと考えられる。石の碎片や原石が床面のほぼ全面で検出された。素材となる剥片を原石から剥離する際や、素材剥片から石製模造品の祖形を成形する際に生じたものが多いようである。

52a号住居は東壁にカマドが敷設されている、4.0×4.4mのやや長方形の竪穴建物である。石製模造品の未製品や滑石の剥片が数多く出土していることから、建物内部で製作していたことが分かる。また明瞭な痕跡は残さないが、模造品の研磨に使用された可能性のある磨石も出土している。

52a号住居から出土した遺物に特筆すべきものがある。それは床面の中央から出土した、最大胴径が58cmにもおよぶ大型の壺形土器である。また祭祀用と考えられる小型の壺も見られる。52a号住居は1号祭祀の北側に隣接しており、密接な関連がうかがえる。52a号住居は、祭祀に使用する石製模造品の製作工房であると同時に、祭祀に使用する土器を保管する場所であったと思われる。



正直A遺跡の石製模造品工房

0 10m



正直A遺跡52a号住居出土遺物



正直A遺跡1号祭祀想像図

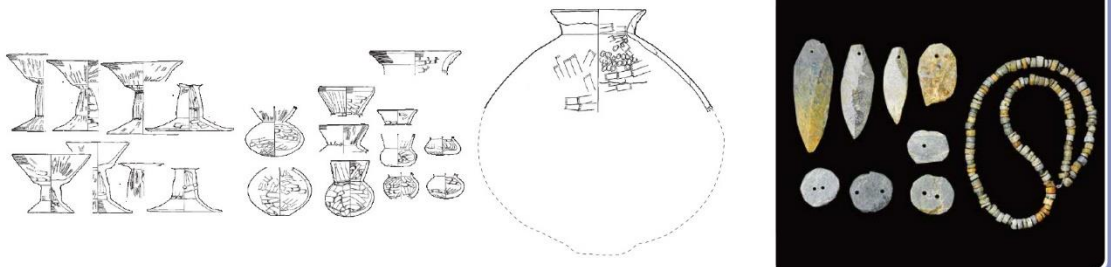
3 大型壺を用いた祭祀

石製模造品を用いた祭祀の場合では、石製模造品が単独で出土することは少なく、多くの場合土師器を伴っている。その器種は高坏や椀坏あるいは小型壺といった供膳具とともに壺などの貯蔵具を伴う。前述した52a号住居から出土した壺形土器と特徴を同じくするものが、須賀川市上ノ代遺跡1号溝・白河市舟田境遺跡1号祭祀などから出土している。いずれも5世紀の遺跡で、石製模造品・供膳具を伴うなど、共通する部分が多い。特に大型の壺は、胴部が張り出す形態、そして口縁部が折り返し状にするなど、共通性も見られる。

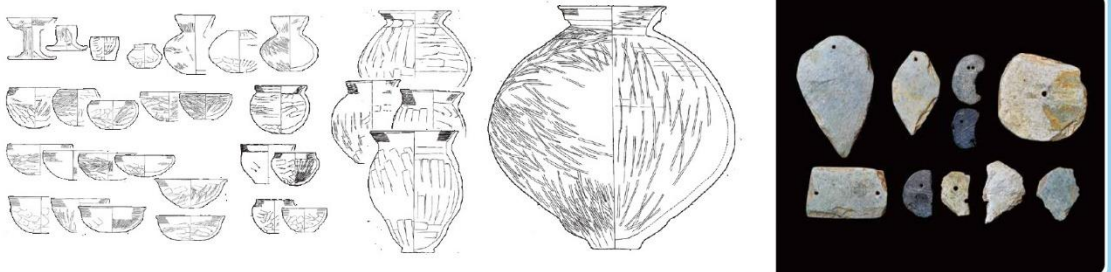
壺に入れられていたものを推定する資料には恵まれないものの、その形態から液体であることは十分に考えられ、酒でなかったかと考えられる。

大型壺形土器を伴う祭祀遺構

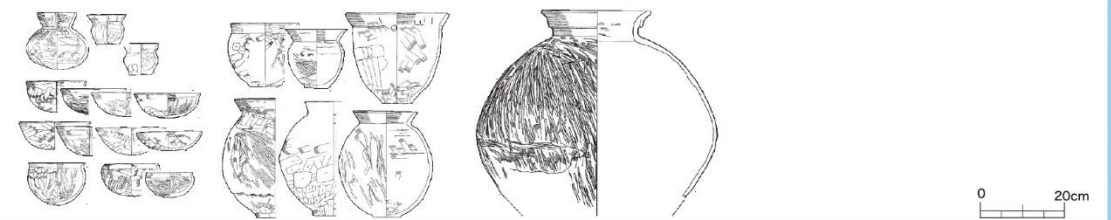
舟田境遺跡
1号祭祀



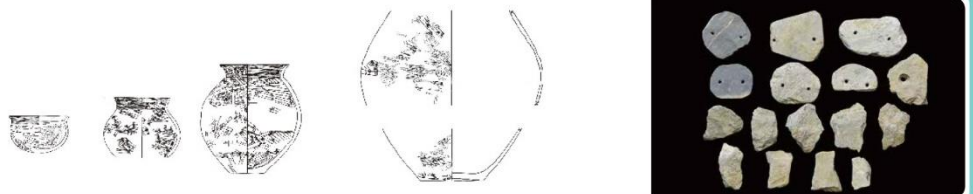
上ノ代遺跡
1号溝



正直A遺跡
52a号住居



勝口前畑遺跡
1号祭祀



Ⅲ 石製模造品の製作

1 郡山市南東部における東北地方有数の古墳時代集落

阿武隈川中流域に位置する郡山市南東部の地域では、5世紀後半から6世紀初頭の遺跡が数多く確認されている。この地域では阿武隈川とその支流である谷田川による肥沃な沖積地が広がり、集落は東の阿武隈山地から延びる台地の先端に営まれる。北から北山田遺跡・南山田遺跡・永作遺跡・山中日照田遺跡などで、いずれも集落に隣接して古墳が築造される。北山田遺跡の北西に位置する宮田A遺跡は台地上の遺跡とは異なる沖積地にあり、方形周溝墓が検出された。こうした遺跡群の東方では石製模造品の材料となる、蛇紋岩・滑石の産出地があり（愛宕山鉱山）、近年まで大規模な採掘が行われていた。



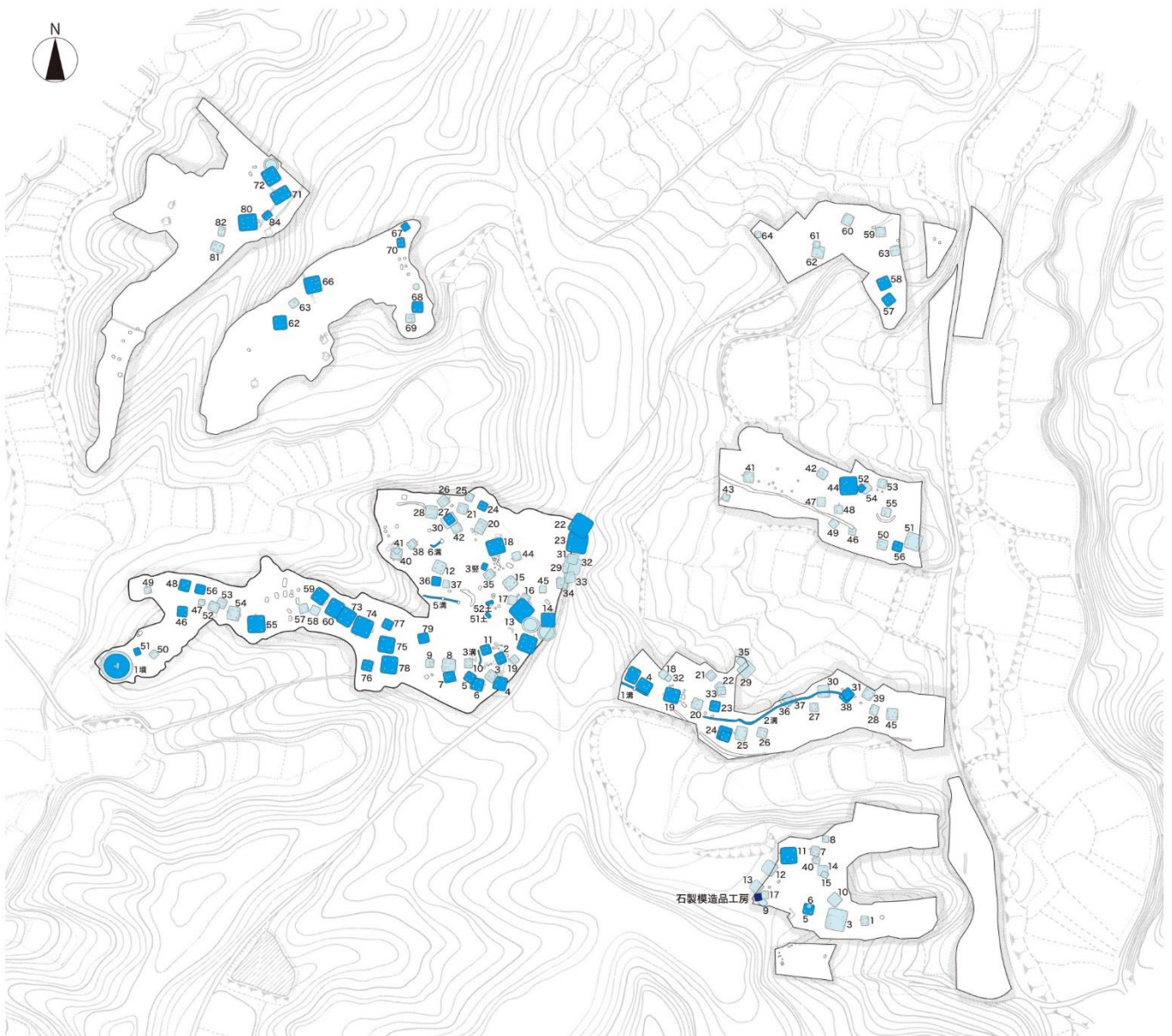
南山田遺跡・永作遺跡遠景(南西より)

2 南山田遺跡と永作遺跡

—— 丘陵上の集落

面的に発掘調査がなされた北山田遺跡・南山田遺跡・永作遺跡・正直A遺跡では、いずれも石製模造品の工房が確認されている。石材採取地で採取される石材、工房で見つかった石材、そして竪穴建物・祭祀遺構から出土する石材には、共通するものが見られる。そのため当該地域では、遺跡群の東方向で石材が採取され、それぞれの集落へ石材を運び入れ製品を製作していたと考えるのが合理的である。

東部の丘陵上に営まれた集落の中で最も規模が大きかったのが、南山田遺跡と永作遺跡である。両遺跡は丘陵上に連続している一連の遺跡である。5世紀後半の竪穴建物が110棟検出された、当該期では東北地方有数の集落である。



南山田・永作遺跡石製模造品出土遺構

石製模造品出土遺構

0 100m (1/3,000)

—— 南山田遺跡

南山田遺跡は丘陵の北半に位置し、西側眼下には北流する阿武隈川とその支流の谷田川に形成された沖積地を望むことができる。検出された総数86棟の竪穴建物のうち、5世紀後半のものが80棟となる。遺跡からは鍛冶工房が2棟確認され、その内の69号住居からは炉と金床石がセットで確認された。また、特筆すべき遺構として1号墳がある。1号墳は西に緩やかに傾斜する台地の先端に築造された径13mの円墳である。周溝から出土した遺物に陶質土器の小型把手付脚付壺、把手を有する多孔の甑こしきなど、朝鮮半島に由来する遺物が出土した。規模は小さいものの、半島系の遺物入手できる人物が埋葬されていた。

石製模造品が出土した竪穴建物に、規則性などは見られない。なお、79号住居からは精巧な作りの勾玉が8点見つかった。石製模造品の製作工房は確認されていないものの、竪穴建物や調査区内から数多くの原石が出土しており、石製模造品工房のあった可能性がある。



1号墳及び1号墳出土遺物



66号住居遺物出土状態
竪穴建物コーナー寄りの床面から壁に接して双孔円板5点と白玉が出土



79号住居遺物出土状態

—— 永作遺跡

永作遺跡は、南東方向へせり出した、狭小な舌状台地上に位置する。5箇所の台地と谷部を調査した結果、総数64棟の竪穴建物が検出され、その内、5世紀後半のものが30棟存在することが判明した。19号住居からは羽口3点、24号住居からも羽口3点が見つかっている。いずれも専用羽口であり、鍛冶工房の可能性もある。

石製模造品工房は、調査区の最も西側の部分で確認された、一辺3.1mの方形竪穴遺構である。竈や炉などの施設は確認できなかったが、遺構の遺存状態が悪いため、住居兼用の工房であったか専用工房であったかは明らかではない。特徴的なのは石製模造品の原石の多さである。土器が集中する地点では椀坏が折り重なった状態で検出され、それらに原石が入られた状態で確認された。原石は、大型のもの、中型のもの、小型のものに分けられ、それぞれ坏の中に入れていた。



永作遺跡全景(南より)



永作遺跡石製模造品工房全景



永作遺跡石製模造品工房遺物出土状態



石製模造品工房想像図

IV ヤマト政権の国家的祭祀

建鉾山祭祀遺跡

1 建鉾山祭祀遺跡

—— 建鉾山

福島・栃木・茨城県の県境付近では、奥羽山系を源流とし東流する阿武隈川が北に大きく向きを変える。その支流である社川は八溝山系から東に流れ、北に向きを変え阿武隈川と合流する。同じく八溝山系を源流とする久慈川は、北東方向から南方向へと大きく流れを変えている。

建鉾山は白河市表郷に所在する円錐状の整った形状で、遺跡の北面では東流する阿武隈川の支流・社川が沖積面を形成し、山頂とは比高差約100mを測る。建鉾山祭祀遺跡は山の北側緩斜面にある。

すぎやましげつく
梶山林継氏は全国の祭祀遺跡を検討する過程で、建鉾山祭祀遺跡が「奥州一宮、式内都々古和気神社との関係ある地であり、陸奥国の入口でもある」とし、長野県神坂峠などとともに、東国における最も重要な祭祀遺跡と指摘した(梶山1972)。佐田茂氏は、建鉾山が三輪山とともに山の祭祀を代表するものとし(佐田1991)、白石太一郎氏もまた、建鉾山における遺物の量は西日本の主要な祭祀遺跡の例をはるかに凌駕することから、その重要性を指摘する(白石1995)。このように建鉾山祭祀遺跡は、石製模造品を用いた祭祀を考える上で極めて重要であることは、多くの研究者が指摘するところである。

近年では、建鉾山祭祀遺跡に隣接する同時期の三森遺跡が明らかとなり、建鉾山祭祀遺跡を理解する上で不可欠な成果の蓄積が進んでいる。



建鉾山遺跡遠景古写真(北より)



建鉾山遠景(北東より)



建鉾山遠景(北より)

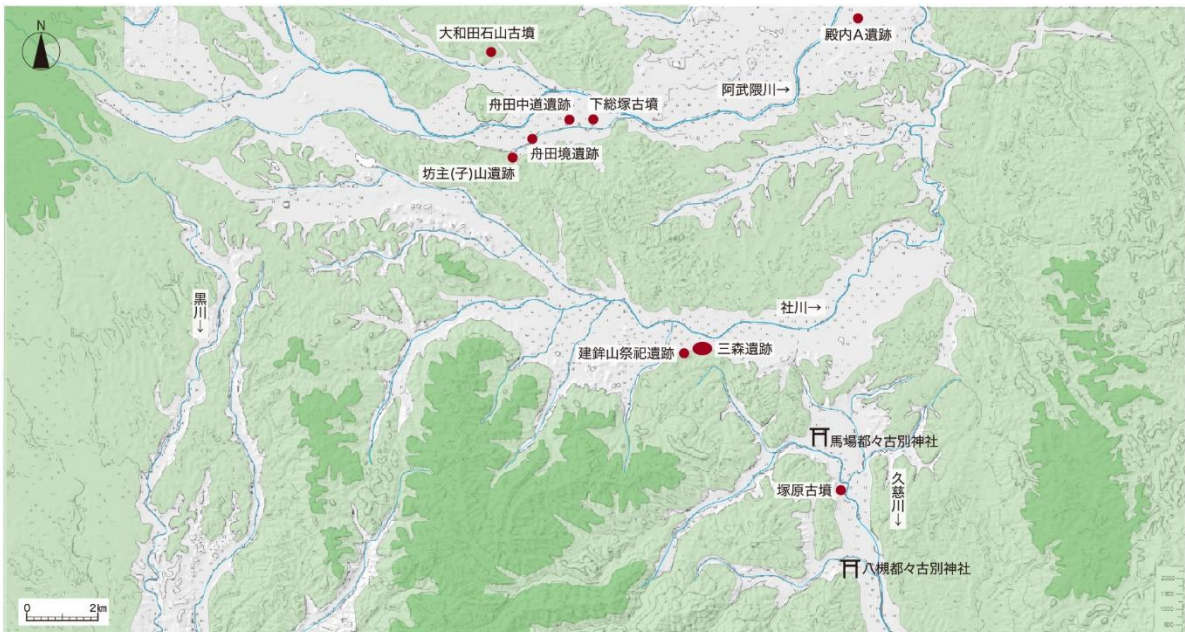
—— 建鉾山祭祀遺跡出現前夜

建鉾山祭祀遺跡は東日本有数の祭祀遺跡であるが、これまで出現前段階の様相が不明であったため、突如出現するとの印象が強い。しかし、出現期あるいはそれ以前に遡る祭祀遺物も確認されている。

阿武隈川南岸では、先ず坊主(子)山遺跡の刀子形石製模造品^{とうす}が上げられる。大型で丸みを帯びる把手、鞘部には線刻がなされ、精巧な作りである。採集資料のため遺跡の様相は不明だが、古墳の存在が想起される。舟田境遺跡では祭祀遺跡の具体的内容が明らかにされた。剣形は基部加工がなされ断面が菱形の形態を含む。出土土器は供膳具が高坏と小型壺で占められ、その年代は5世紀第一四半期と考えられる。先述したように大型の壺が出土していることも特徴的であり、遺跡の立地からは水に関する祭祀の可能性がある。

一方、久慈川の支流も建鉾山付近まで伸びる。その久慈川流域では、小規模な円墳群の一基と考えられる塚原古墳から石製模造品^{しのぎ}が出土している。石製模造品は剣形2点で、把部を作り出し大型のもの、そして基部が平坦に加工され両面に鍔を有するものである。前者の形態は東北地方では他に例を見ない特徴的なもので、当地域において最も初期に位置付けられる。

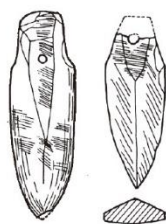
上記したように、建鉾山祭祀遺跡の周辺では、その出現以前に遡ると考えられる石製模造品が確認される。そのため、建鉾山で祭祀が行われる素地が既にあり、大規模な祭祀が執行されたことが窺える^{うかが}。



建鉾山祭祀遺跡と関連遺跡



坊主(子)山遺跡出土石製模造品



塚原古墳出土石製模造品



舟田境遺跡出土石製模造品

—— 磐の位置関係

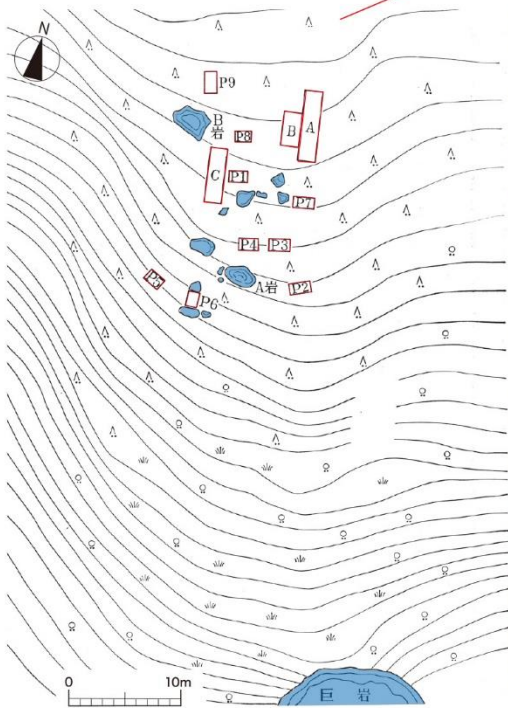
建鉾山には、いくつかの起点となる岩がある。頂上には「建鉾石」と呼ばれる高さ1mほどの岩がある。頂上付近は特に岩盤の露出が顕著で、建鉾山の上部は岩山であることが観察される。北側の山腹には巨岩が見られる。岩山の一部と思われるが、露出している部分は幅10mを超え、その前面に「大澤権現」と刻まれた石碑が見られる。巨岩から下方は谷状地形を呈し、40mほど北側に降りた地点に1～3mの岩が点在している。巨岩との位置関係などから、1958(昭和33)年の國學院大學による発掘調査地点と考えられる。



発掘調査区付近より巨岩を望む



発掘調査区付近
1～3mの岩が点在している。巨岩との位置関係などから、1958年の國學院大學による発掘調査地点と考えられる。



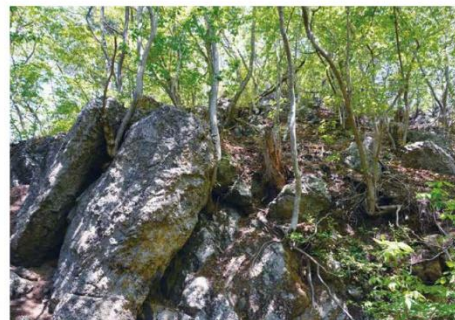
建鉾山山腹の巨岩(北より)



大澤権現



建鉾山山頂
奥の岩が通称・建鉾石



山頂付近

2 過去の調査

—— 首藤保之助氏による採集の記録

この建鉾山祭祀遺跡及び三森遺跡については、首藤氏による遺物採集の記録が残され、その年代は1938(昭和13)年にさかのぼる。首藤氏はその後もたびたび同地を訪れ遺物を採取している。

—— 大場磐雄氏(國學院大學)による実査

首藤氏は國學院大學の大場磐雄氏と親交があり、國學院大學による本格的な学術調査に繋がってゆく。大場氏は「遺跡に対する最初の調査は昭和13年首藤保之助氏であり、同氏の示教を得て翌14年夏自分も亦実査した」と記しており、1939(昭和14)年に調査が行われることとなる(大場1952)。

—— 亀井正道氏(國學院大學)による調査

その後、1958(昭和33)年と1959(昭和34)年に國學院大學の亀井正道氏により本格的な発掘調査が実施された。その際、建鉾山祭祀遺跡は「高木地区」、三森遺跡は「三森地区」と呼称されている。建鉾山祭祀遺跡の高木地区における調査では、建鉾山中腹の巨岩から40m北側、1~3mの岩が点在する地点で行われ、岩の周辺に設定したトレンチ及びピットから多量の石製模造品や土師器が多数出土した。出土遺物の中には、鉄鉾も含まれており、建鉾山という名の由来を感じさせる遺物の出土は興味深いものであった(亀井1966)。

建鉾山祭祀遺跡出土遺物(亀井正道1966『建鉾山』)

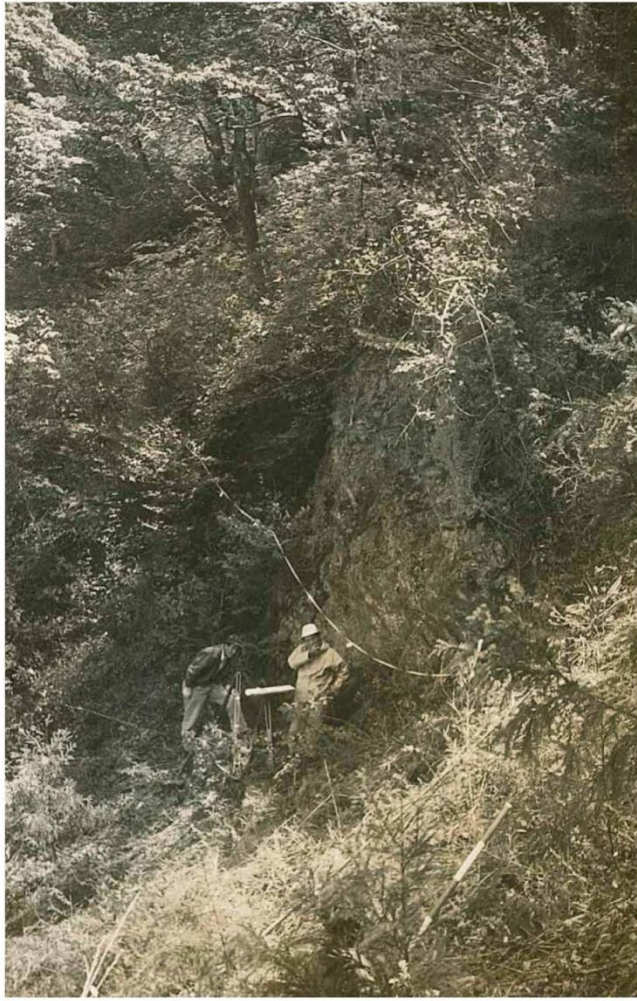
遺跡	地区 トレンチ	石製模造品											備考				
		刀子	斧	鎌	他	剣	円板	鏡	勾玉	白玉	他	紡輪		土師器	他		
三森地区第Ⅰ地点	Aトレンチ					3											國學院大學
	Bトレンチ					20	22		1	49	子持勾玉1						
	Cトレンチ					7	4			2							
	Dトレンチ					6	3		2	20							
	Eトレンチ					26	29			178							
	調査以前・首藤保之助氏採集					46	37		2	4315		1	2	ガラス小玉2			須賀川市立博物館
三森地区第Ⅱ地点	調査以前・個人採集		1				2			若干							
三森地区総計			1			108	97		5	4564		1	2				
高木地区	第1・2次調査	6	2	1		76	93	2	2	260	銅1		6	青銅儀鏡1・鉄鉾1・鉄剣3・鉄刀4		國學院大學	
	調査以前の遺物	23	24	10		493	425	25	22	18			58				
高木地区総計		29	26	11		569	518	27	24	278			64				
三森地区・高木地区総計		29	27	11		677	615	27	29	4842		1	66				



建鉾山祭祀遺跡出土遺物

珠文鏡、鉄鉾・鉄剣、滑石製石鉞が出土した。石鉞の類例は群馬県の白石稲荷山古墳・上細井稲荷山古墳出土例がある。

建鉾山祭祀遺跡 (昭和33年)



「靈巖」



「Bトレンチ拡張区」



「遺跡より山頂を望む」



「Aトレンチ3区」

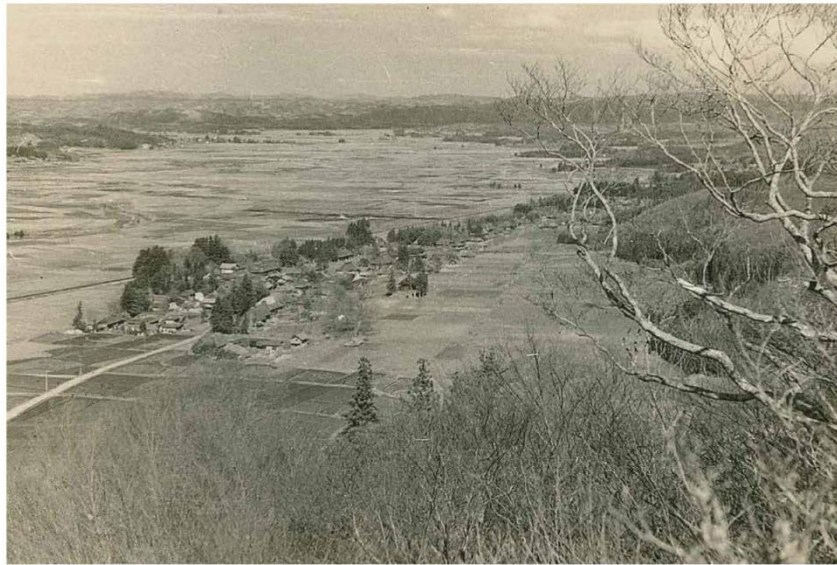
3 祭祀執行者と祭祀の場

三森遺跡は建鉾山の東約500mに位置する。亀井氏による調査の際は「三森地区」と呼称され、第Ⅰ～Ⅲの三つの地点で調査が行われた。第Ⅰ地点は1957(昭和32)年4月、第Ⅱ・Ⅲ地点は1959(昭和34)年8～9月に行われ、石製模造品や土師器などが出土した。ただ、この際の調査は点的な調査で、遺跡の内容を明らかにするまでには至っていない。

1993(平成5)～1995(平成7)年には、表郷村教育委員会により面的な調査が実施された。そして、建鉾山祭祀遺跡とほぼ同時期の5世紀に営まれた遺跡の内容が明らかにされた。大型周溝(一辺46.5m)・長方形周溝(20×14.5m)・長方形の二重柱列区画(14.5×11m)が発見された。この長方形の区画で石製模造品を使用した祭祀が行われた。なお、長方形周溝は二重柵列を破壊する形でほぼ同じ場所に作られている。祭祀の空間が二重の柵列から周溝に区画された空間に変化しており、その変遷も興味深い。

竪穴建物の出土遺物では、26号住居から羽口が出土し、18号住居から銅地金、13号住居から鉄素材の可能性のある板状鉄製品が出土しており、鍛冶をはじめとする金属加工技術がもたらされていたことが分かる。さらに韓式土器など特徴的な遺物も多数出土した。

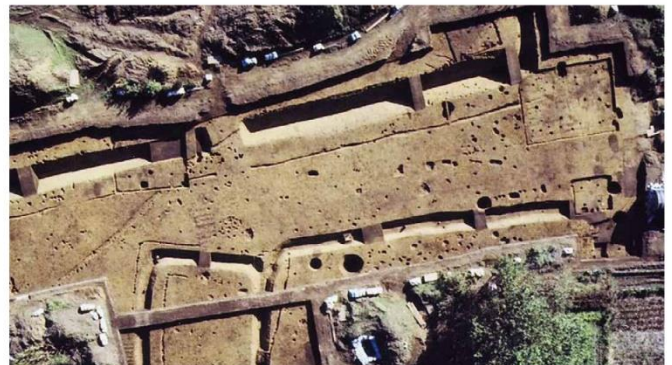
遮蔽施設による「祭祀の場」、方形区画の「居館」、鍛冶工場の「生産遺構」が確認された点は重要である。地域の中核ともいえる首長居館が隣接することは、建鉾山祭祀遺跡の成立に、この居館の首長が重要な役割を担っていたことを暗示している。そして、祭祀の場と祭祀執行者の関係性が具体的に把握できる貴重な事例であると言える。



建鉾山より三森遺跡を望む
画面中央に西方寺の堂が見え、そのやや下方左に“月夜見桜”が見える。



三森遺跡より建鉾山を望む
正面の巨木が月夜見桜。その右側に見えるのが西方寺。



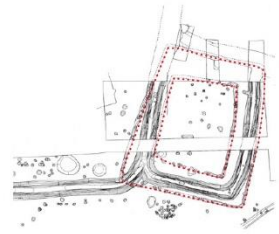
三森遺跡(上方南)



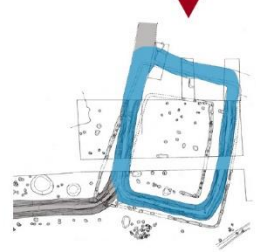
26号住居出土羽口



18号住居出土銅地金



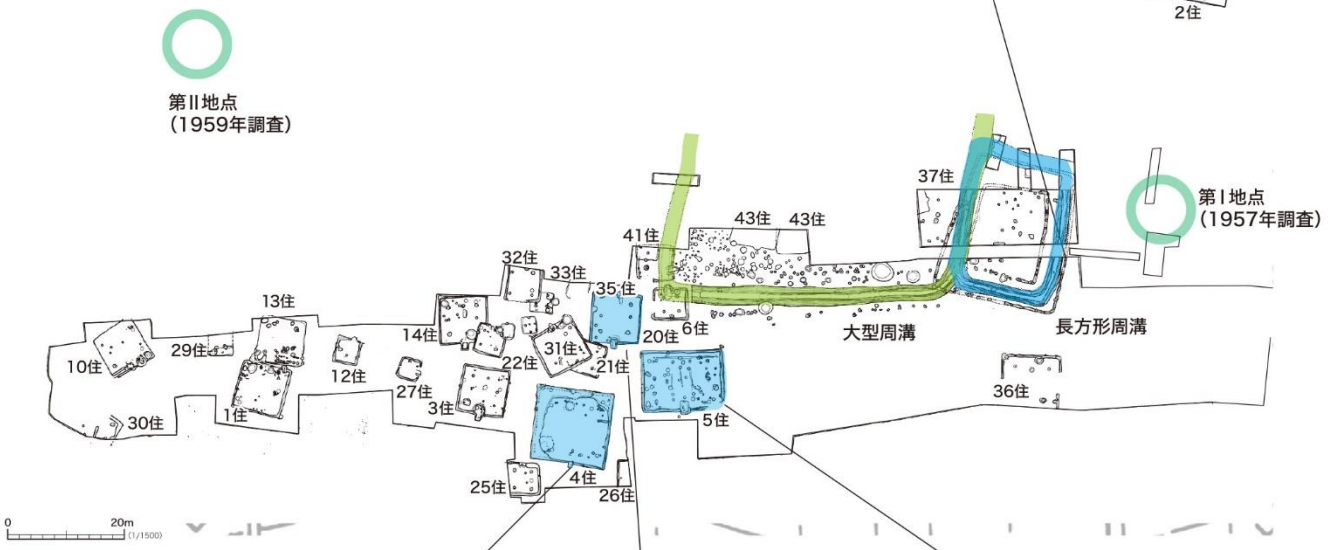
二重柵列



長方形周溝



長方形周溝出土石製模造品



4号住居出土石製模造品
三森遺跡出土遺物



20号住居出土石製模造品



5号住居出土石製模造品

4 歴史に彩られた建鉾山周辺

—— 都々古別神社

建鉾山付近は、棚倉町の都々古別神社の旧社地と伝えられている。この都々古別神社は、『延喜式』では「都都古和気神社」と記されている。久慈川沿岸には、棚倉町馬場・同八槻、茨城県久慈郡大子町に、三つの都々古別神社の存在が知られている。神社の沿革等によれば、景行天皇の御代、日本武尊が東夷征伐の際、神を都々古山に祭祀したのが始まりとされる。なお、後に坂上田村麻呂が日本武尊を合祀したと言われる。

このうち馬場都々古別神社には、「鉾形祭具」と呼ばれる祭祀用の銅鉾が3点残されている。全長180cmほどで、その内の1点に「應永十年」(1403年)の紀年が刻まれたものが確認される。

古くから式内社を巡る論争などがあるようだが、ここでは触れる必要は無い。伝説や逸話の残る点をこそ評価すべきであろう。ヤマトタケルの東征伝説は、この地にヤマト発祥の祭祀が導入・展開する姿を反映しているのではないだろうか。



馬場都々古別神社



鉾形祭具 馬場都々古別神社蔵



馬場都々古別神社磐座

—— 建鉾山の別称・古称

現在、一般に建鉾山と称されているものの、国土地理院地図などに記されているのは「武鉾山」である。また、古くより様々な別称・古称が存在する。

概ね、武鉾山・建鉾山・高鉾山・武矛山などといった鉾に関するものが多い。ヤマトタケルの東征伝説に基づくと考えられるものに尊登山(タケノブヤマ)、そこから転じたと考えられる竹ノ坊山・高野峯山・武野峯山がある。さらには神社の名称とも関連する都々古山・筒古山も知られている。

—— 地名に残る名称

亀井氏の指摘にもあるように、付近に残る関連名称は多い。「三森」(ミモリ)はミモロに通じる。三諸山・御諸山(ミモロ山)は三輪山の別称として知られる。建鉾山は三輪山型祭祀との関連が指摘されており興味深い。「月夜見桜」と呼ばれる槻の木が、三森の集落内にある。根廻り10m・樹高15mの老木で、槻の大樹を月明かりに咲き誇る桜と見間違えたところにこの名の由来があると伝えられる。「祝部内」(ほうりゅうじ)という地名が、三森の南側に大字名として残る。祝(ほうり)は神に奉仕する人の総称で『令義解』に「祝部」が見える。

建鉾山がある「高木」は『古事記』におけるタカミムスビノカミの別称「高木神」を想起させる。そして安政3年の古図には、山の中腹に柵が設けられ、そこに「御宝前」と記されており、この場所が神聖な場所であったことがうかがえる。さらに建鉾山の北側には、現在も「神前」という小字名が残っている。

このように、神話性あるいは祭祀性を帯びた地名・名称がいくつも確認され、古来より重要な祭祀の場であったことを今に伝える。調査に訪れるたび、地元の方が「ヤマトタケルが来たという伝説があるんですよ」と話しかけてくれる、深い歴史を感じさせる場所なのである。

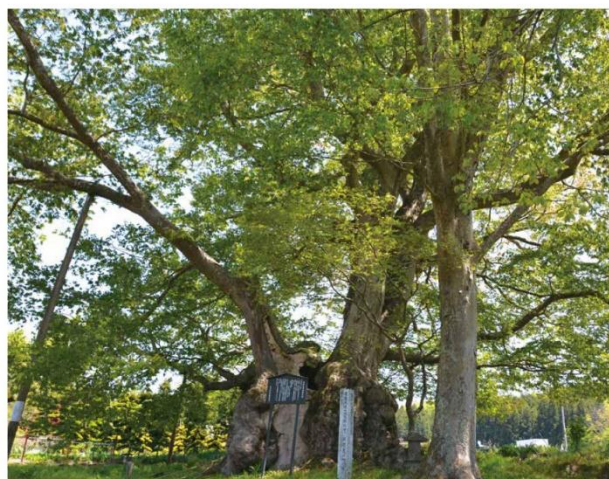


安政3年の古図

表郷に伝わる1856(安政3)年に描かれた古図。建鉾山の中腹に柵が描かれ、「御宝前」という名称が見える。



「祝部内」



月夜見桜



建鉾山における祭祀想像図

5 東北地方への玄関口

建鉢山祭祀遺跡は、那珂川・久慈川上流域と阿武隈川流域を結ぶ地点にあり、下野・常陸から陸奥へ至る最初の地点にあたる。巨視的にみると山稜や分水嶺などの障壁近くにあり、障壁により境を成す令制国を繋ぐ交通路上に位置する。

こうした地理的特徴を等しくする遺跡に、信濃と美濃の境にある長野県阿智村の神坂峠祭祀遺跡、信濃と上野の境に位置する群馬県松井田町・長野県軽井沢町の入山峠祭祀遺跡、そして、陸奥と出羽の境にある山形県尾花沢市八幡山祭祀遺跡がある。さらに、これらの遺跡では、刀子形などの古墳から出土する石製模造品を含み、対比可能な内容であることが分かる。

建鉢山が東北地方への「玄関口」にあたり、その扉は関東地方と阿武隈川流域、そして仙台平野を繋ぐものであることがわかる。特に5世紀においては、群馬から仙台平野へ至るルートには渡来系文物が色濃く残り、重要な位置を占めたとの指摘は多い。

建鉢山における祭祀の展開は、東日本における祭祀の動向を敏感に映し出したものと言える。関東地方の首長は、畿内を凌駕するほど数多くの石製模造品を製作し、独自とも言える展開をみせる。そうした中、東日本における一つの核になった場所が建鉢山であり、その精神的イデオロギーを支えた祭祀遺物たる石製模造品も重要な役割を果たした。その際、主導的な役割を担ったのは群馬県の有力首長であり、その下で在地の首長が必要な整備を進めていった。5世紀、畿内から群馬県そして東北地方へと至る古東山道ルートが重要視される歴史的背景の中で、必然性を持って成立した遺跡と捉えることができる。

遺跡名	所在地	石製模造品ほか								
		刀子	斧	鎌	他	剣	円板	鏡	勾玉	白玉
八幡山	山形県尾花沢市	4	5	4		26	134	4	5	
建鉢山	福島県白河市	29	26	11	銅1	569	518	27	24	278
入山峠	群馬県松井田町 長野県軽井沢町	3				207	57	1	7	268
神坂峠	長野県阿智村	15	1	1		310	69	4	27	903

八幡山遺跡は本稿で紹介した数を、建鉢山遺跡・入山峠・神坂峠は、各報告書記載の数を示した。

● 石製模造品出土遺跡

